ばってんウーマン

1978.4月
NO10

長崎女性問題研究会　事務局　松崎澄子 Tel.

力と若さを求めて

田吉チエ

春は名のみの風の寒さよ、未だに冬から脱皮し得ない昨今である。然し久方ぶりに立山のバス終点に立ち、昭和54年の長崎港の景色を眺めた。街のいらかの隅々に、そして岩屋の山々、稲佐の連山、背景には金比羅山の緑に映えて桜はすでに散り果てようとしていた。

3月末からこの4月上旬のあわただしさよ。地方統一選の声々も一時消えて、まことに自然はこんなにも美しかったのか。悲喜こもごもの人の世の姿を今更のように反省してみる。黄砂に霞んで長崎の街々はすでに初夏への躍動をはらんで動いているらしい。

長崎の人は、長崎の女はこれでよいのかしら。力が欲しい。特に女の人々の真の力が……。政治と選挙を目の前にして私はつくづくと考えさせられたものである。知ることの必要を。生活の実態を歩いて知ることを。自分の目で、耳で知ることを。風のたよりの噂話で識った程度の判断は恐ろしい。

3月の末、O市工女史の生涯最終の講会

逐次刊行物
'74.10.15
国立女性教育会館
女性教育情報センター

質問演説を聴きに出かけた。婦人の地位向上の一部面である「管理職へ何故女性を登用できぬのか」「米の消費生活について一般市民、学校教育は如何に協力すべきか」等々、地域に即した実例による切々たる意見の熱情に頭を下げて帰ってきた。七期28年の議員生活ご苦労様でした。バリジはアクセサリーではない。私共、市民が実状を知って支え、真実のものを選出する努力をしなければ……

同じく3月末の最終休日、来七人団体グループで一泊の旅をし、女手で働くやりくり、子育ての悩み、グループ活動の難しさと、よろこび等々、心ゆくまで語り合い、ここにも黙々として生き抜く母である女性の活動に感激したものである。お互いに頑張りましょう。

若さとは年令ではない。沸々として燃える情熱のことである。（9日夜記す）

女のノート

4月16日、27日と編集会議を開きました。目下、白石・岸本で宣伝パンフレットの原案づくりに頭を痛めております。5月16日の例会には、見本なりともみなさまにお示しして、内容の把握に一助となれば……と思っています。販売会議はそれ以後のことだと思います。

ばってんウーマンミニ図書館

（会員の間で廻し読みをするための情報です）

※今回は集中的にNBC宮本圭子さんの蔵書を扱いました。彼女は忙しい人なので読みたい人は岸本まで連絡をして下さい。

NO	書名	著者	出版社
35	元始女性は太陽であった。	平塚らいてう自伝	大月書店
36	火の国の女 高群逸枝	河野信子	新評論
37	神近市子自伝 ―わが愛わが斗	神近市子	講談社
38	アメリカ女性史	E・H・アルトバック	新潮社
39	婦人論のイデオロギー	村上薫子編	啓隆閣
40	老い（上・下）	ボーヴォワール	人文書院
41	花ひらく婦人たちの国（ドイツ民主共和国の婦人と生活）	大高ゆさる	鳩の森書店
42	あしたの女たちへ	樋口恵子編	学陽書房
43	女・こども・コミュニティ	小原信	P・H・P
44	世界の婦人運動	小林勇編	大月書店
45	婦人のあゆみ百年	日本婦団連編	〃
46	近代日本女性史	米田佐代子	新日本新書
47	たくさんの足音	櫛田ふき	
48	沖縄女性史		沖縄タイムス
49	むしろ女人の性を礼拝せよ	平塚らいてう	人文書院
50	入門女性解放論	一番ヶ瀬康子編	亜紀書房
51	反結婚論	岡田秀子	〃
52	女性はどれくらい自由か（フランス婦人の現状とその解放）	マドレーヌ・ヴァンサン	新日本新書
53	国際婦人年メキシコ会議の記録		ジャパンプレスサービス
54	いい女のあなたへ	大蔵智子	じゃこめてい出版
55	婚姻―過去と現在―	Bマリノフスキー、Rグリフォールト	社会思想社
56	性の神話	エブリン・リード	柘植書房
57	アメリカの女たち	中野東子	PHP
58	日本の女性史	伊藤康子	学習の友
59	たくさんの足音	櫛田ふき	草土文化

✤ 県立図書館の利用のし方 ✤

上西山町にあります。電話26-5257
開館 9:00～8:00（夜） 但し日曜日は5時まで。
休館日は月曜日と月末、祝祭日、年末年始。
貸出期間は20日間、3冊まで。
身元を保証するもの（運転免許証とか健保証）と印鑑を持参すればその場で借りられます。

性周期と粘液観察法について

加藤奈智子

女性には卵巣や子宮に、特有なバイオリズムがあります。それらはみな統一されていて、月経周期、卵巣周期あるいはひっくるめて女性の性周期とよばれています。

その性周期はおよそ一ケ月の周期で、思春期（11～12才）より更年期（45～50才）まで繰り返されています。月経周期についてはご存知のとおりですが、卵巣周期については、あまり関心が寄せられていなかったのですが、最近、受胎調節法の一方法として、排出される粘液の種類によって、受胎可能と安全期に分れ、それを観察することによって避妊に応用できることが判って、[illegible]光をあびてきました。

卵巣周期とは、卵巣から出される数種のホルモンの消長のリズムのことです。

このホルモンの作用によって、女性は定期的に外陰部に粘液の変化を自覚することが出来ます。あまり多くの例ではありませんが、1～2ケ月の観察を続ければ、おおよそ、その変化を自覚することが出来るようになります。

この粘液観察法を多くの人に理解してもらいたいと希っています。

新しい女性の生き方として自分のバイオリズムを理解することが必要ではないでしょうか。

新会員紹介

津田尚美

専業主婦となると、家の中で刺しゅうをしたり、洋裁をして、たとえそれがどんな創造性を必要としても、それは物対自分であって、人とのふれあいとか社会との接点がどうしても少なくなってしまう。

私は洋裁してる時も楽しいし、絵をかくのも好き。でも人が何をしゃべったとか、どんな表情をしたとか、みんなで何かをしようとして、話し合って決めていくその過程をみるのはもっと楽しい。

私は今、「子ども劇場」で走りまわっているけどこの中で私はあそんでいるってところ。

そしてこの「ばってんウーマン」の会に入ってこれも又私の社会との接点のひとつにしたい。子供を通してとかサインを通して社会をみるのではなく、私の社会としてあそぶつもりです。

参加しませんか！

毎月15日例会、会費300円（準会員200円）

5月例会は16日（火）PM6時半～9時

中央公民館オー研修室

（魚の町市民会館内）

魔女の話

森 裕子

魔女の歴史は古い。人間が粘土板に楔形の文字でとどめた世界最古の法律書であるバビロニアのハンムラビ法典（紀元前一七〇〇年）に、すでにその記述があるという。

またキリスト教以外の宗教でも魔女はその名を残している。

現在では彼女の棲家はもっぱらお伽話の中か、場末の三流映画館の看板に限られ、その独自性を発揮しているようだが……。

前者では、やせこけて目が落ちくぼみ、醜いかぎ鼻で赤い髪を頭巾でおっい、せむしの身体を杖でささえて歩く醜悪極まりない老婆の姿で登場し、子供達をおびえさせる。

その反面、後者では「可愛い魔女」、時には「僕の小悪魔」などと呼ばれ、もっぱらセックスアピールでうったえる若い美人で、男たちを魅惑するということになっている。

老婆と肉体派美女、現在までの男性の美意識に照らし出すとき（その基準は常に外面的容姿と男性への服従度でしかない）まさに両極的存在であるこの二者に、しいて相似点をみつけるならば、不思議な超能力を駆使するという点である。お伽話の魔女について、「ほうきにまたがり空をとぶ」、「動物に変身する」、「天気を思うままにする」という明らかに人間ばなれしたファンタジーに富んだ超能力の他に知っておかなければならないのは、母から子へ、それから又その子へと代々受け継いでいかれた草の知識による「薬、毒薬、ほれ薬などの調合」という医学のなかった時代には魔法というより他なかった能力を持ちあわせていたということである。所謂、民間療法の担い手であった彼女達と「大学」という組織の中から生まれいでた近代医学の父ともいわれる初期の医者達との間で激烈な勢力闘争があったと想定してもおかしくないだろう。

彼女の超能力が子供達や民衆に向って働くのに対し、もう一方の若い魔女のそれはもっぱら文明国の男性に向ってのみ効能があるようだ。それは期待する者の頭脳にのみ作用するテレパシー能力で、その際、発信源においては頭脳が全く考慮に入れられていないのが特徴的である。女性の能力そのものと全く関係ない何かが、時には女性の意志にも全く関係なく、男性にある変化をもたらすという意味で、まさに超能力なのである。

キリスト教は全ての肉欲の罪を女に帰してきた。果してその他の世界宗教、イスラム教、仏教、儒教に於いてそうではないといえるだろうか？アダムとイヴの楽園追放の責任をイヴが負っている限り、全てのイヴの子孫である女性は、男性の誘惑者としての嫌疑を免れることはできないだろう。

ヨーロッパの中世の歴史を学んだことがある人

でも、この「魔女」という言葉から大量虐殺や血なまぐさい臭いをかぎつける人はまれだろう。実際、13世紀から18世紀後期まで（一七九三年ポーゼンに於ける最後の魔女裁判まで）少なく見積っても9億の女性が火刑に処せられた。30億という推定さえある。彼女達の産んだ子供まで火の中に放り込まれたこともある。その絶頂が「ヒューマニズム」「ルネッサンス」の時代であることは興味深い。薪の山はうず高く積まれ、魔女を焼く火はヨーロッパの空をあかあかと染めつくした。その炎は大洋を越え、ピューリタンの植民地アメリカ大陸まで火の粉を飛ばした。

いったい魔女とは何者だったのだろうか。各地に流布している彼女をテーマにした数々の絵は、余りにも全てを語りつくし、悪魔や魔女の世界が存在することを充分納得させるに足るものであった。教会内部に描かれた天国の世界を信じたように人々は「魔女狂宴（サバト）」の実在を信じたにちがいない。

文盲の民衆をひきつけ、てっとり早く、しかも適格に鮮やかに印象づける映像による手段をこの時代の支配者は巧みに利用した。

一五一四年、ハンス・バルドゥング作の版画は全裸の魔女達が毒薬を作っている様子をダイナミックに描き出している。

一ハニ七年、フランシスコ・ゴヤによる「サバト」では、大きくて長い2つの角をもつ牛に似た悪魔の化身である黒い野獣が子供を連れた魔女たちが輪になって取り囲んでいる。

悪魔の左側には、恐らく堕胎のため産声を発することなく生まれでた胎児が次々に棒にぶら下げられている。右手に一段と高く坐し、赤児を胸に抱いた女の表情は、不思議なことに、逆境にあって助けを求める母親によく似ている。彼女の肩に左手をおいた野獣の禁色の目は、やさしく慈愛にあふれている。恐らくゴヤは知っていたのだろう。中世的な魔女のテーマの一連の作品の裏に描かれずにきた隠され続けてきた真の魔女の姿を彼は描きたかったにちがいない。それにこの絵が胸を打つのは、このテーマが私たち現代女性の悲劇でもあるという点である。恋愛、姓娠、男の裏切り、この絶望的状況で、いったいどうすればよいのか？

いかなる道が残されているのか？

いったい魔女にかけられた真実の嫌疑は何であったのか？　どのような悪業を働いたというのか？　幼児誘拐殺人のゆえか、毒薬調合のゆえか、あるいはサバトの乱交パーティーのゆえか、判決理由はさまざまで、幻想に充ちていても、中世以来、残虐この上もない拷問の果て、「魔女」の烙印を押され、女性が大量に組織的に虐殺された厳然たる事実は動かしようがない。

★隠崎・後藤さんの職場では　労基法の学習会のため、「男女平等と母性保護」のパンフレットを作成！

[redacted]

私たちの伝言板

◎1円・5円玉カンパ現在高八〇〇六円です。

◎いそのジュニアへの会からのプレゼントは「アルバム」にしました。

◎毎日新聞4月24・25日「一点集合」に勝野昭龍記者がばってんウーマンの会を紹介！

◎4月11日第31回婦人週間「長崎県婦人のつどい」には会長はじめ多くのばってんウーマンの仲間が参加しました。男女の平等と婦人の社会参加をすすめるというテーマで討議がすすめられましたが、主催者側の意識の大幅なたち遅れ、女性問題に関しての現状の認識不足は、提言者の選択に又、保育施設のないことに、出席者に現在多くの問題をかかえている若い母親や勤労者が少なかったことに如実にあらわれていたように思います。（岸本）

◎佐世保で作家の井上光晴氏が開いている文学伝習所の同人誌「群れ」の合評会が諫早で4月29日開かれ、鶴初美さんが出席しました。会員の太田博子さんは小説「雲雀」を発表。文学とは何かということは、その人の生き方そのものを問うことになると鶴さんは絵を描くことと共に、書くことにも意欲をもっています。

ご意見・ご批判をお寄せ下さい。

編集　岸本桂子